

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：32694

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02791

研究課題名(和文) 平安期鎌倉期の日本語における無助詞名詞句の運用システム

研究課題名(英文) Operation system of noun phrase without particles in Japanese during the Heian and Kamakura periods

研究代表者

山田 昌裕 (YAMADA, MASAHIRO)

恵泉女学園大学・人文学部・教授

研究者番号：70409803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は平安期鎌倉期それぞれの日本語において、助詞が下接しない名詞句が、情報伝達上どのような役割を担い、それがどのようなシステムで運用されていたのか、その全体像を明らかにすることが目的である。

無助詞名詞句には多様な格成分が見られるものの、平安期鎌倉期をとおして約96%がガ格かヲ格であり、その分布の様相は名詞が有生であるか無生であるかによって大きく異なっていた。無助詞名詞句の運用は、有生名詞は対象になりやすく、無生名詞は行為者ではないという理解のもと、行われていると結論付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

無助詞名詞がどのような述語と対応し、どのような格成分として分布しているのか、無助詞名詞が有生なのか無生なのかによって、その分布の仕方にどのような影響をもたらし、それはなぜなのかについて研究をした。

このような研究を通して、これまで断片的に捉えられていた無助詞名詞の運用システムを共時的・体系的に位置づけることができ、またこの結果を踏まえることにより、古代日本語の言語類型的研究の発展も期待できる。

研究成果の概要(英文)： In this study I considered that what kind of case was the noun phrase without particles and how did they identify the noun phrase without particles in Japanese during the Heian and Kamakura periods.

Although there are various cases in the noun phrase without particles, About 96% of the noun phrase without particles acted as case of "GA" or case of "WO" during the Heian and Kamakura periods. The aspect of the distribution differed greatly depending on whether the noun was animate or inanimate. We conclude that the noun phrases without particle are used under the understanding that the animate noun is hard to be an Object and the inanimate noun is not Actor.

研究分野：日本語史

キーワード：無助詞名詞 平安期鎌倉期 格成分 有生名詞 無生名詞 言語類型

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

平安期鎌倉期の日本語においては、現代日本語以上に助詞が下接しない名詞句（以下、これを無助詞名詞句とする）が多く見られる。小田（1997）によれば、『源氏物語』における無助詞名詞句に現れ得る成分として、主格、ヲ格、二格、ニテ格、ト格、接続句的に解釈されるもの、格関係を有さない提題などが見られるという。例えば、「ここにも殿上人あまた参りたり」の「殿上人」は主格としての役割を有し、「御文御覧すべき人は」の「御文」は対格としての役割を有していると見られる。このような無助詞名詞句と格助詞標示のあり方から、平安期における格標示の研究や言語類型的研究は散見されるが、いずれも個別的な論文資料や個別的な例をあげて述べるにとどまり、平安期や鎌倉期といった共時的観点からの体系的な無助詞名詞句の振る舞いは研究されていない。特に鎌倉期に関しては皆無である。

これまで古代語の無助詞名詞句を対象とした体系的研究が行われなかったのは、個人的な調査ではその労力と時間に限界があったためである。しかし近年、国立国語研究所によって『日本語歴史コーパス』が開発され、オンライン検索ツール「中納言」を用いて無助詞名詞句の検索が可能となったことにより、個人レベルでの研究が可能となった。またそのデータはパソコンによって加工し分析することも可能となり、作業効率を飛躍的に高めることができるようになった。

本研究は、以上のような学術的背景をふまえ、実施するものである。

### 2. 研究の目的

本研究は平安期鎌倉期それぞれの日本語において、無助詞名詞句がどのような格成分として分布しているのか、その全体像を明らかにした上で、情報伝達上どのような役割を担い、それがどのようなシステムで運用されていたのか、明らかにすることが目的である。具体的な数値をもって無助詞名詞句の振る舞いを示すこと自体、これまでの研究にはないものであり、その数値は今後の理論的考察の基盤ともなるであろう。

具体的には以下の～を明らかにする。

統語的役割：無助詞名詞句がどのような述語と対応し、どのような格成分として分布しているのか、その分布の全体像を数値をもって明らかにする。 無助詞名詞句の語性：無助詞名詞句の有生性無生性が格成分の分布の様相とどのように関わっているか。 構文的環境：無助詞名詞句の分布は主節、従属節などの構文的環境とどのように関わっているか。 情報伝達上の運用：統語的役割が形式的に付与されていない無助詞名詞句が、どのようにして情報伝達上支障もなく運用されていたのか。

### 3. 研究の方法

#### 【データの作成】

まずは国立国語研究所の検索ツール「中納言」を用いて、国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス 平安時代編』（短単位データ 1.1 / 長単位データ 1.1）、国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 説話・随筆』（短単位データ 1.1 / 長単位データ 1.1）（ただし、『今昔物語』は除いた）、国立国語研究所（2017）『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 日記・紀行』（短単位データ 1.0 / 長単位データ 1.0）より無助詞名詞句を検索し、Excelに落とし込む。次に無助詞名詞句それぞれに、語性やテキストにおける統語的役割、構文的環境等の情報を付加する。このような手順により、平安期鎌倉期それぞれの分析用データを作成する。作成したデータは適宜研究協力者によってチェックを行う。

#### 【分析の方法】

##### 数量的分析

無助詞名詞句に追加した情報をもとに、Excelによるデータの数量的分析を行なう。まずは無助詞名詞句が持つ統語的役割のバリエーションを数量的に分析することで、共時態としての無助詞名詞句の全体像を捉える。統語的役割のバリエーションに関しては小田（1997）による分析があるが、それぞれがどの程度の割合なのか明らかにされていない。無助詞名詞句が主としてどのような格成分を担っていたのかを明らかにすることは、今後の日本語文法研究の重要な基盤となるだろう。

##### クロス集計による多角的分析

- a. 無助詞名詞句の統語的役割と有生性・無生性との相関関係を明らかにする。
- b. 無助詞名詞句の統語的役割と構文的環境との相関関係を明らかにする。

### 4. 研究成果

ガ格名詞、ヲ格名詞、二格名詞等の名詞句における、格助詞の標示非標示という観点から全体像を捉えるため、副詞的に用いられている成分（時名詞、場所名詞）、格助詞の付与が不可の成分（並列句、慣用句、呼びかけ）、具体的な格が想定できない無助詞名詞句は除外した（は少数であり全体像の把握に影響を与えるものではないが、この分析は今後の課題となる）また「欠伸をする」「欠伸する」などのサ変動詞文に関しては別に集計した。

#### 4.1 無助詞名詞句の統語的振る舞い

##### 4.1.1 格成分としての分布

小田（1977）で指摘されているように、無助詞名詞句にはガ格やヲ格をはじめ二格、デ格、ト格、ヨリ格などさまざまな格成分が見られる。また「ありさま（ガ・ヲ）いと問はまほしく」のように複数の格が想定される場合も存在する。

下記の【表1】は、それぞれ想定される格成分の実数と割合を示したものである。

【表1】	平安期		鎌倉期	
	実数	割合	実数	割合
ガ格	14384	66.2%	8588	77.3%
ヲ格	6314	29.0%	2167	19.5%
ガヲ格	676	3.1%	188	1.7%
二格	198	0.9%	128	1.2%
ガ二格	57	0.3%	17	0.2%
ニヲ格	64	0.3%	0	0.0%
ニヲヨリ格	19	0.1%	3	0.0%
デ格	16	0.1%	16	0.1%
ヲヨリ格	8	0.0%	3	0.0%
ヨリ	2	0.0%	4	0.0%
ト格	3	0.0%	2	0.0%
ニヨリ格	0	0.0%	1	0.0%
合計	21741	100.0%	11117	100.0%

平安期は、ガ格66.2%、ヲ格29.0%となっており全体の95.3%を占める（ガヲ格を含めると98.3%となる）。鎌倉期は、ガ格77.2%、ヲ格19.4%となっており全体の96.6%を占める（ガヲ格を含めると98.4%となる）。多様な格成分が存在するものの、そのほとんどはガ格、ヲ格であり、その他の格成分は僅少であることがわかる。鎌倉期において、ガ格が10%ほど増加し、ヲ格が10%ほど減少しているのは、鎌倉期のヲ格名詞において、格助詞「ヲ」の標示率が20%ほど増加したことによって、ヲ格の無助詞名詞句の実数が減り、無助詞名詞句全体におけるガ格の割合が相対的に増加したためである。

#### 4.1.2 統語的役割と有生性無生性

上で見たように無助詞名詞句には多様な格成分が認められるが、名詞の有生性無生性によって、格成分の分布に違いが見られる。【表1】の上位について作成したものが【表2】である。

【表2】	平安期				鎌倉期			
	有生名詞		無生名詞		有生名詞		無生名詞	
ガ格	5391	89.4%	8993	57.2%	3581	94.3%	5007	68.4%
ヲ格	580	9.6%	5734	36.5%	165	4.3%	2002	27.3%
ガヲ格	16	0.3%	660	4.2%	11	0.3%	177	2.4%
二格	22	0.4%	176	1.1%	21	0.6%	107	1.5%

平安期鎌倉期を通して、有生名詞の約9割はガ格に偏り、ヲ格にはなりにくいと言える。意志を持つ有生名詞は行為者として解釈されやすく、有生名詞が対象として扱にくいということによってガ格への偏りが見られるものと考えられる。一方、無生名詞はガ格が優勢ではあるものの、ヲ格も少なからず存在する。意志を持たない無生名詞は、他動詞文において行為者として解釈されず、対象であることが認識されやすいからであろう。

#### 4.1.3 無助詞名詞句と述語

無助詞名詞句がどのような述語文に分布しているか、無生名詞と有生名詞に分けて報告する。

平安期の無生名詞（15709例）は、他動詞文ヲ格が35.5%（5580例）で最も多く、ついで非対格自動詞文ガ格が29.0%（4557例）、形容詞文ガ格が25.1%（3949例）となっており、無生名詞全体の89.7%を占める。無生名詞の意味役割は、行為の対象、存在主体や変化主体、属性の

主体や情意の対象が中心であると言える。非対格自動詞文ガヲ格、形容詞文ガヲ格やガ格名詞文などもこれに含まれると考えられ、これらを合わせると無生名詞全体の94.7%(14872例)となる。総合的に捉えると、無生名詞の文中での意味役割は行為者以外全般ということになる。ガ格において非能格自動詞文がある程度見られるが、実質的には「波風(ガ)立たず」のような変化主体または事態発生と考えられるものであり、やはり無生名詞の意味役割は行為者以外全般であることがわかる。

鎌倉期の無生名詞(7320例)は、非対格自動詞ガ格が36.8%(2617例)が最も多く、ついで他動詞文ヲ格が26.1%(1913例)、形容詞文ガ格が24.8%(1816例)とつづき、無生名詞全体の86.7%となる。さらにガヲ格や名詞文などを合わせると、無生名詞全体の91.2%(6674例)となり、鎌倉期の無生名詞が担う意味役割の様相は、平安期と変わらないと見てよいであろう。

平安期の有生名詞(6032例)は、他動詞文ガ格が28.4%(1715例)で最も多く、ついで複文ガ格が26.1%(1573例)、非対格自動詞文ガ格が14.8%(893例)、非能格自動詞文ガ格が13.1%(788例)、他動詞文ヲ格が9.4%(565例)、形容詞文ガ格が5.5%(329例)となっており、多様な述語と対応していることがわかる。意味役割としては、行為者を中心として、存在主体や変化主体、属性の主体、行為の対象など多岐にわたる。無生名詞ではほとんど見られない他動詞文ガ格や複文ガ格の割合が高い点に注目されるが、その要因は有生名詞が意志を持つところにあると考えられる。

鎌倉期の有生名詞(3797例)は、複文ガ格が34.2%(1300例)で最も多く、ついで他動詞文ガ格が28.3%(1073例)、非対格自動詞文ガ格が14.4%(548例)、非能格自動詞文ガ格が11.0%(419例)、他動詞文ヲ格が4.2%(158例)、形容詞文ガ格が4.0%(151例)となっている。平安期同様、多様な述語と対応しており、意味役割としては、行為者を中心として、存在主体や変化主体、属性の主体、行為の対象など多岐にわたっている点は変わらない。

平安期鎌倉期を通して、無生名詞の意味役割は、行為者以外全般であり、有生名詞の意味役割は、行為者を中心として、存在主体や変化主体、属性の主体、行為の対象など多岐にわたっている。無生名詞ではほとんど見られない他動詞文ガ格や複文ガ格の割合が高い点が注目されるが、その要因は有生名詞が意志を持つところにあると考えられる。

以上の格的振る舞いや意味役割は、無助詞名詞句の有生性無生性という点から見れば予想されることではあるが、そのことを数値によって裏付けることができたことは本研究の成果だと考える。

#### 4.2 無助詞名詞句と構文的環境との相関

ここでは無助詞名詞句の構文的環境における分布を確認する。表中の非従属節は主節(単文)と複文を含む。【表3】は有生名詞、【表4】は無生名詞に関する表である。

【表3】	有生名詞							
	ガ格				ヲ格			
	平安期		鎌倉期		平安期		鎌倉期	
従属節	1966	36.5%	1192	33.3%	396	68.3%	108	65.5%
非従属節	3425	63.5%	2389	66.7%	184	31.7%	57	34.5%
合計	5391	100.0%	3581	100.0%	580	100.0%	165	100.0%
	二格				ガヲ格			
	平安期		鎌倉期		平安期		鎌倉期	
従属節	11	50%	11	52%	10	67%	4	36%
非従属節	11	50%	10	48%	5	33%	7	64%
合計	22	100%	21	100%	15	100%	11	100%

【表3】によれば、有生名詞においては、平安期から鎌倉期にかけてのガ格、ヲ格の割合に特に変化は見られないと言ってよいであろう(二格、ガヲ格に関しては実数が少ないため言及できない)。【表4】によれば、無生名詞においては、平安期から鎌倉期にかけてガ格の数値に変化が見られる。ガヲ格の変化もこれに連動するものと思われる。要因として従属節におけるガ格名詞を「ガ」「ノ」で標示する割合が高くなったと推測する。

【表4】	無生名詞								
	ガ格				ヲ格				
	平安期		鎌倉期		平安期		鎌倉期		
	従属節	6433	71.5%	2888	57.7%	4232	73.8%	1482	74.0%
非従属節	2560	28.5%	2119	42.3%	1502	26.2%	520	26.0%	
合計	8993	100.0%	5007	100.0%	5734	100.0%	2002	100.0%	
【表4】	二格				ガヲ格				
	平安期		鎌倉期		平安期		鎌倉期		
	従属節	145	82.4%	80	74.8%	441	71.7%	106	60.9%
	非従属節	31	17.6%	27	25.2%	174	28.3%	68	39.1%
合計	176	100.0%	107	100.0%	615	100.0%	174	100.0%	

また【表3】【表4】におけるガ格、ヲ格に注目すると、有生名詞ガ格は従属節内の割合が低く、有生名詞ヲ格、無生名詞ガ格、無生名詞ヲ格は従属節内の割合が高いことがわかる。意志を持つ有生名詞は、ガ格行為者として遠くの述語まで係っていくという性質を示していると考えられる。

#### 4.3 本研究のまとめ

これまで無助詞名詞句にどのような格成分が見られるのかに関しては研究があったが、実数を基にした全体像は不明であった。平安期鎌倉期における無助詞名詞句の振る舞いを具体的な数値で示せたことが本研究の成果である。

平安期鎌倉期を通して無助詞名詞句は約95%がガ格またはヲ格であった。有生名詞は約9割がガ格に偏り、無生名詞もガ格が優勢ではあるが、ヲ格も3割程度見られた。このような中において、鎌倉期にかけての変化も見られた。ヲ格無助詞名詞句は鎌倉期になると減少するが、それはヲ格名詞における助詞「ヲ」の標示率が増加したためであった。また従属節における無生名詞ガ格も減少するが、その要因は助詞「ガ」「ノ」の標示率が高くなったことであると推測される。この2つの変化からは、時代が下るとともに「ヲ」「ノ」などによる格標示率が高くなることが予想される。

平安期鎌倉期を通して、無生名詞の意味役割は、行為者以外全般であった。有生名詞の意味役割は、行為者を中心として、存在主体や変化主体、属性の主体、行為の対象など多岐にわたっていた。無生名詞、有生名詞の統語的振る舞いと意味役割をまとめると、以下のような図にまとめることができる。

	ガ格行為者	ガ格非行為者	ヲ格対象
無生名詞			
有生名詞			

上記のことを踏まえて、無助詞名詞がどのようなシステムで理解運用されていたのかを明らかにしたい。無助詞名詞句の運用にあたっては、名詞の有生性無生性が重要な役割を持つ。無生名詞は行為者ではなく、有生名詞は対象になりにくいという理解のもと無助詞名詞が運用されていたものと言えるであろう。いずれも「である」ではなく「ではない」という、いわば消極的な振る舞いである。格が明示されないわけであるからしかたがない。しかしながら、必要であればヲ標示という手段が存在し、情報伝達上は、このシステムで支障がなかったものと考えられる。無生名詞、有生名詞の振る舞いが重なるガ格非行為者の部分に関して、非対格自動詞文や形容詞文はいずれも一項述語なので、やはり情報伝達上の支障はなかったものと考えられる。このような運用システムがあったからこそ、平安期鎌倉期にはガ格項を表示する専用の助詞が未発達であったものと考えられる。

#### 【引用文献】

小田 勝(1997)『源氏物語における無助詞の名詞』『聖徳学園岐阜教育大学紀要』33

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山田昌裕	4. 巻 32
2. 論文標題 平安期中央語の言語類型 格活性の有無	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 恵泉女学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田昌裕	4. 巻 31
2. 論文標題 平安期散文資料における無助詞名詞の統語的機能 中間報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 恵泉女学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 115 - 127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 山田昌裕
2. 発表標題 言語類型的に見る平安期中央語
3. 学会等名 韓国日本文化学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田昌裕
2. 発表標題 無助詞名詞の統語的機能 平安期散文資料を中心に
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田昌裕
2. 発表標題 平安期散文資料における無助詞名詞の統語的機能
3. 学会等名 韓国日本文化学会第54回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	杉本 雅子  (SUGIMOTO MASAKO)		